

「田一枚植て立去る」のは誰か
―追悼とコントラストの視点から―

神保と志ゆき

一 はじめに

《田一枚植て立去る柳かな》『おくのほそ道』（以下、『ほそ道』という。）芦野の段に載る著名な一句である。この句には、その主体を誰と解するかにつき、近世以来の議論がある。特に昭和三〇年代以降は、研究者、俳人入り乱れての様々な見解が勃興し、複雑な議論状況にある。

本論は、屋上屋を架することを承知の上、この古くからの論点に新たな視点を加えようとするものである。結論から述べると、新たな視点とは次のとおりである。

この句は、芭蕉に柳を見せたがること熱烈であった芦野の領主、故芦野資俊に対し、芭蕉が追悼の情を込めた一句であったと理解する。

もつとも、この句は、同じく『ほそ道』に載る《塚も動け》の句とは異なり、あらわな追悼句そのものではない。

そのため、依然として、追悼の情という芭蕉の主観を離れた、いわば表の読みと言える客観的な読みがある。そして、表の読み、この句に対する従前の、植えて立去るのは誰かの論点が内包される。本論は、この論点についての諸説のうち、植えるのも立去るのも田植人（注一）との見解を採る。しかし、近年注目されることの少なかったこの見解を正当と解する根拠を明らかにしたい。

二 《田一枚》の句への資俊追悼の情

『ほそ道』芦野の段の全文は次のとおりである（表記は西村本による）。

又清水なかるゝの柳ハ蘆野の里にありて

田の畔に残る 此所の郡守戸部某の此柳

みせはやなと折くゝの玉ひ聞え玉ふを

いつくのほとにやと思ひしを今日此柳のかけにこそ立より侍つれ

田一枚植て立去る柳かな

ここにいう「此所の郡守戸部某」は、芦野の地を領した旗本芦野民部資俊とするのが通説である。資俊は「桃酔」の俳号を持ち、さらに、一族にも桃の字を含む俳号を持つ人々があつて、芭蕉（桃青）との繋がりが存したとされる（注二）。

芦野の段には、芭蕉が、芦野資俊すなわち「戸部某」から、「清水なかるゝの柳」、つまり、西行の歌《道のべに清水流るる柳影しぼしとてこそ立ちどまりつれ》ゆかりの柳を、見せたいと熱心に勧められていたことが書かれている。西行ゆかりの柳を訪ねたことのみならず、「戸部某」と挙げる点は、資俊への挨拶と受け取れる（注三）。「言ふ」の最上級の敬語「の玉ひ聞え玉ふ」を用いていることもこれを補強するであろう。

曾良本の初稿には、「此所の郡守故戸部某」とあつたが、後、「故」の字は見せ消ちで削除された。『ほそ道』の成立が、資俊の没した元禄五年六月二六日以降との推定をもたすことで知られる「故」の一字である。資俊は、実際の『ほそ道』の旅の時点では存命であつたことから、「故」の字が削除されている。

この芦野の段の本文については、既に「ここに「戸部某」を出したのは、資俊追悼の思

いを込めて記したのであろう。それが思わず全体の構成意識から離れて「故」を入れた理由になろう。」とする見解（注四）や、中尾本の貼紙下に見られる当初の芦野の段の本文は、

芦野ゝ里に清水流るゝの柳有 田の畔に残る 此所の郡守常にかたりきこえ給ふをいつくの程にやおもひ侍しにけふこの柳のかけにこそ立寄つれ

であり、「資俊の死を知った芭蕉は、あらためてその人柄を偲んで、単なる「郡守」に「故戸部某」以下の記述を加え、親昵の感情をこめた」とする見解（注五）が見られた。

このように、芦野の段の本文に資俊への追悼の情を見ることができることから、さらに一步を進め、本文に連続する《田一枚》の句にも、資俊追悼の情を見ることができないのではないかというのが本論である。

ただし、これまでこの句に資俊への思いを重ねる見解が絶無だったわけではない。《田一枚》の句の主体が誰かについての従前の諸説は後述するが、そのうち、幻想の中で芭蕉が田植をし、芭蕉が立去るとの見解を採る尾形仿は、「芭蕉は、…田に自ら下り立ち、西行の古歌、柳の精、そして、かつて自分を招いてくれた、今は亡き芦野の領主民部資俊の霊を慰めるための奉仕の田植えをする。」（注六）としていた。しかし、芭蕉の幻想（主観）における田植の目的の一つが資俊の慰霊だとする大層迂遠な解釈であり、かつ、なぜ資俊への思いを読み込むのか論拠も不明であった。本論は、端的に「立去る」に資俊の姿を重ねるとともに、その論拠を提示する。

まず、《田一枚》の句は、「立去る」者を詠んだ句である。しかし、中尾本の貼紙下にあった当初の句はこれと異なる。当初の《水せきて早稲たはぬる柳陰》（「早稲」は早苗の誤記と見られている）という句が《田一枚》の句に改められたのは、「故戸部某」以下の加筆と時を同じくしてであった。「故」の字の存在から、芭蕉の意識に、資俊の逝去があったのは確実である。この点より、芭蕉は、「立去る」に、世を去った資俊の姿を重ねたのではないかと思われるのである。「立去る柳」という措辞からも、愛した柳を残しての逝去を想像することは自然であろう。

『ほそ道』には、金沢の一笑に対する《塚も動け我泣声ハ秋の風》という慟哭の一句がある。『ほそ道』以外でも、寿貞尼への《数ならぬ身となおもひそ玉祭り》、嵐蘭への《秋風に折て悲しき桑の杖》など、芭蕉に追悼句の作例は少なくない。芭蕉が弟子たちを仲裁すべく赴いた大坂で客死した事実からしても、その情の深さを無視することはできない。まして、資俊は、最上級の敬語「の玉ひ聞え玉ふ」を用いる相手であり、柳のある地を領した資俊は亭主、柳を訪う芭蕉は客であった。そして折々に柳を見るよう勧められていた親密さや、柳への熱い風雅の心を分かち合った関係性からすれば、本文のみならず、柳の一句に資俊追悼の情を込め挨拶することは、必然ですらあったと解する。いわば、芦野の段本文という長い前書をもった一句である。

もっとも、芭蕉は、『ほそ道』において、資俊の実名を憚り「戸部某」とぼかした書き方をし、また、『ほそ道』行脚の当時存命であった資俊について「故」の字を削除している。このことから、《田一枚》の句は、追悼の情を込めた句ではあっても、最終的に、一笑に対するような明確な追悼句として成立させた句ではないと思われる。

他方、追悼の情を込めたとの理解に対しては、「立去る」は良いとしても、「田一枚植て」は資俊と無関係との疑問が想定される。前記のとおり、芦野の段の本文には資俊の追

悼の情を見る見解においても、『田一枚』の句にまでそれが及ぼされなかったのは、この点が解決できなかったからであると思われる。この点の解は次のとおりである。

芭蕉と同時代、延宝四年刊行の俳諧付合語集である『俳諧類船集』の「植 ウル」(ウルは原文ママ)の項には、付合語として「田」のあるのは当然として、説明文に「人道敏政 地道敏樹」(人道は政を敏(と)くし、地道は樹(うゆること)を敏(と)くす)の語が挙げられている。これは四書五経の一つ『中庸』の言葉で、「然るべき人にたよると政治は速やかに目的を達成でき(るが、それはちょうど)大地にたよると草木の生長が速やかに達成できる(ようなものです)」。あるいは「人の世界にとって政治の大切なことは：大地にとって草木の生長を欠かせないのと同じだ」という意味を有する(注七)。

資俊は、下野国芦野に陣屋を置く三千石の「郡守」たる為政者であり、「植」に為政者のイメージを浮かべることが不自然ではない。

加えて、新田開発を行い、芦野家を、一般に大身旗本と言われる三千石を越える身代にしたのが資俊であった(注八)。「田植」とは、「田殖」である(注九)。また、一枚の「一」は、芦野氏の定紋、一文字に巴にも通う。

「此柳みせはやなと折く」にの玉ひ聞え玉ふ」という資俊が、芭蕉の心に、西行ゆかりの柳への思慕を植え付けたという意味においても、植える主体に資俊の姿を重ねることが可能であろう。

『笈日記』に「故主君蟬吟公の庭前にて」などの前書付きで載る《さまざまの事おもひ出す桜かな》は、芭蕉が旧主藤堂蟬吟を偲んだ句である。この句と《田一枚》の句が、中七から下五へのかかり方及び「樹木名十かな」で構成される下五において共通の形式をとること(注一〇)も、柳の句に柳を愛した資俊追悼の情を込めたとの理解に沿う事実ではないだろうか。桜の句は、『笈の小文』では前書を伴っておらず、やはり蟬吟への主観を離れての理解を可能とする句であろう。

三 従来の諸説とその批判的検討

このように、本論は、芭蕉は《田一枚》の句に、芦野資俊追悼の情を込めたと理解するが、既述のとおり、これは追悼句そのものではない。

芭蕉は、「故」の字を削除するという判断を行っており、資俊追悼の情という主観を離れても、いわば表の読みと言わば客観的な読みによって、この句は一句として成立する。

そして、追悼の情を込めた読みと表の読みの両者は重層的に存在すると理解する。従前のこの句における、植えるのは誰か、立去るのは誰かという論点は、この表の読みに内包されるものである。

そこで従前の論点を整理する。

近世より、「立去る」主体については、蓼太『芭蕉句解』以来の芭蕉とする説、正月堂『師走囊』以来の田植人とする説が対立して来た。昭和三〇年台においても、「植て」の主体は田植人だが、「立去る」主体についてこの両説の対立があると整理される議論状況が見られた(注一一)。

もともと、田植人が植え、これを見ていた芭蕉自身も植えたような気分になって立ち去るとの山本健吉説(注一二)を皮切りに、以後、諸説入り乱れた状況にある。先行研究に拠り、主要な見解を分類すると次のとおりである(注一三)(注一四)。

	「植て」の主体	「立去る」の主体
イ	田植人	芭蕉
ロ	田植人	田植人
ハ	芭蕉の主観	芭蕉
ニ	田植人、芭蕉の主観	芭蕉
ホ	田植人	田植人、芭蕉
ヘ	田植人、芭蕉の主観	田植人、芭蕉
ト	柳の精	柳の精

本論は、このうちロの見解を至当とするが、ごく簡単ながらもまずは他説につき検討する。諸説のうち、多数説と見られているのが、近世以来のイの見解である。

これは、西行の歌の《しばしとてこそ立ちどまりつれ》を踏まえ、西行同様しばしのつもりだったが長居しすぎた芭蕉が「立去る」というものである。しかし、清水流るゝを田植に、立止まるを立去るとした、西行歌と芭蕉句の照合という技巧（蓼太『芭蕉句解』に「句法模写変態口授」とある）に捉われるものといえる。これでは宗因『松島一見記』（寛文三年成立）の《時雨にもしばしとてこそ柳陰》と五十歩百歩というべき西行歌のなぞりであり、「一句として談林的な古歌のパロディ以上の詩趣を認めることがむずかしい。」（注一五）との批判を免れない。

連歌では、紹巴『連歌教訓』に《立よりてすゞしきまざる木陰哉》と《立さりて涼しきまざる木陰かな》の比較が載るように、「立寄る」「立去る」の選択が言われていた。この点からも、本文に「柳のかけにこそ立より侍つれ」と明示し、続く句で、同一主体が柳を「立去る」のは工夫に乏しく稚拙であろう。まして、地の文を発句、《田一枚》の句を脇句と見るなら（注一六）、なおさら、同一主体が柳に立寄り、続けて、柳を立去るという転じのなさを、俳諧こそ「老翁が骨髓」（『宇多法師』）という芭蕉が是認したとは信じ難い。

芭蕉が立去ったとする説では芭蕉の内心につき、

但し立去る心持は二様に取れるやうである。すなはち、うかく眺めてゐるうちに一枚植ゑてしまつたので、ふと我に返つて急いで立去る、とも、あまり涼しいので腰を落つけてそこから眺めつゝ憩んでゐたが、そのうちに一枚植ゑ了つたので、さあもう行かうかと悠然立あがつた、とも見られるので

といった理解があるが（注一七）、いずれにしても西行歌の下敷きありきの見解ゆえ、思慕する西行ゆかりの柳を实地に訪れた風狂人の内面に迫っていない（詳細は後述）。西行にとつては名もなき柳であったが、芭蕉にとつては思慕する西行ゆかりの柳であり、手軽な気持ちで訪れたものではない。まして、憧れの柳を差し置いて田植という近世日常の景（近現代人が感ずる日本の原風景的な視点は無い）に見とれるのは不自然である。白河の関に到らない芦野で田植に感じ入っていたのでは、みちのく須賀川における一句《風流の初やおくの田植うた》の興も削がれてしまう。

また、この説では、同説を支持する論者からも主体が転換する措辞の難が指摘されて来ている。これについて、宮本三郎の研究（注一八）により「て」の上下で主体が別である用例が論証されたと言われることがある（注一九）。しかし、そのような用法もあるといふにすぎない。実際、『ほそ道』加賀全昌寺での《庭掃て出はや寺に散柳》に「て」の上

下での主体の転換はない。また、「て」の上下で主体が転換する用例は、自然に主体が別と読み取れるからこそ、そのような用例と言えるのであり、主体を巡り論争のある《田一枚》の句とは、むしろその点で異なる。

他方、戦後に唱えられた、一つの動詞の主体を複数と捉える見解（二、ホ、ヘ）や、芭蕉が主観（幻想を含む）において田を植えたとする見解（ハ、ニ、ヘ）は、作者の視点において、他者にそのような、通常の読みとは言い難い技巧的な読みを期待できるのであるか。面白さ、意外性の追求に走りすぎているのではないだろうか（注二〇）。

田植を見ていた芭蕉も植えたような気分になって立去るとの山本健吉説（二）には、なぜ、憧れの柳を訪うた芭蕉が、柳を措いて、「早乙女たちの手振りに見とれ、田植唄に聞きほれていた一種の劇的時間」（注二一）を過ごすのか、やはり、芭蕉の内面に迫っていないとの批判が妥当しよう。

また、山本健吉説の発展形と見られる、芭蕉の幻想の中での田植を言う前述の尾形仿説（二）は、幻想の中であってもなぜ行きずりの芭蕉が田を植えるのか、その前提に欠ける。

主体を柳の精と見る見解（ト）は、やはり現代に唱えられた平井照敏らの見解である。

しかし、『曾良旅日記』が一貫して用いた「遊行柳」の語を『ほそ道』は全く用いず、芭蕉は、『ほそ道』と謡曲「遊行柳」の関連付けを意図しなかったと見られる（注二二）。

中尾本貼紙下の初稿は《水せきて早稲（早苗）たはぬる柳陰》で、次いで《水せきて早稲（早苗）たはぬる柳かな》とした経緯からも、一般の田植であり、柳の精という発想には至らない。柳の精が田植をする故事もない。

四 田植人を主体とすることとその論拠

筆者は、本論の前段で述べたとおり、立去る者に芦野資俊の姿を重ねる読みと重層的に、立去るのは田植人とする口の説を採る。ただし、同じく口の説でも、正月堂『師走囊』の、柳に早乙女の柳腰を見る見解は論外であり、「全く客観の景色」と捉える内藤鳴雪の見解（注二三）とも異なる。

従来、植えて立去るのを田植人と見る説は、文法的な無理はないが、面白くない、感動がないなどと言われ批判されてきた。例えば、

たいせつな「柳」が、田圃風景の一点景としか生かされなくなり、全くの客観的な写生句になってしまふ。そこには長い間、思慕し続け「けふこの柳の蔭にこそ立ちより侍りつれ」の感動がのりうつらない。それをうけてのこの句であるから、もっと主観的に解すべきである。

のようにである（注二四）。しかし本当にそうであろうか。

『ほそ道』の本質（本意と言ってもよい）は、芭蕉の風狂にある。都市から庵への脱出、庵から旅への脱出は隠者文学の鍵概念であり（注二五）、庵を捨て、漂泊の系譜に繋がるうとするのが『ほそ道』である。「予もいつれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます」「そゝろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取もの手につかず」という芭蕉像が『ほそ道』の本質である。

《田一枚》の句は、『ほそ道』道中の作ではなく、執筆時の作である。一句がもたらす効果を考えた句作がされたはずである。『去来抄』の《岩鼻や》の句の解釈に見る芭蕉の発想からしても、芭蕉はその風狂を際立たせることに意を用いたはずである。主人公の風

狂を際立たせる描写を考えると、田植人を配することには次に述べる二点の対比によって生ずる効果という意味がある。修辞技法としての対照法 (antithesis) による効果である。

一点目は、「芭蕉」と「田植人」の対比そのものの持つ効果である。

柳が、ありふれた柳ではなく、西行の古跡であること、その柳への芭蕉の熱情は、句の直前の本文において、執拗に提示されている。

その上で、柳への熱情をもった旅人芭蕉と、生業が終われば柳を気に留めず去っていく田植人を対置することによって、芭蕉の風狂は、相対化され、より鮮明になる。

次に引用する今井文男の見解(注二六)は、従来注目されることが少なかったと思われるが、この点を正当に指摘する。

西行の柳は田の畔にある。その周りは区切られた田がひろがっている。折しも田植えの時で、村は総出といった恰好で多忙の極だ。早乙女らは持ち田を一枚植えたらつぎの田へと立ち去ってゆく。畔の柳などには見むきもしない。村人らはこの柳をいつたい何と考えているのだろうか。自分は由緒ある柳のもとに立ちよって感動し立ち去り得ずにいるというのに――。

今井の見解は、芭蕉と田植人の対比につき、「連句における自他の手法が応用されている」(注二七)とする点でも、説得力を有する。蕉風俳諧において、後に支考が「七名八体」として分類したうちの「向付」と呼ばれる、前句の人物に対し、別人を付ける手法の応用であろう。

定住と旅は対概念と言えるが(注二八)、同様の対比は、『ほそ道』の他の箇所にも見受けられる。古歌や実方中将の故事にある花かつみを誰も知らない里人と、「かつみかつみ」と探し求め日暮れまで彷徨する芭蕉。『ほそ道』安積山の段は、まさしく定住民と風狂漂泊の人芭蕉との対比である。『虚栗』の芭蕉跋文にある「侘と風雅のその生にあらぬは西行の山家をたづねて人の拾はぬ蝕栗也」は、世間の人が拾わないという、世俗的価値観からの逸脱を言い、その先達として西行を挙げたものであった。風狂は逸脱の肯定であり、世俗あつての逸脱である。このような世俗的な価値観の象徴が、世俗の民としての田植人であり、安積山の里人である。芭蕉は、そのような演出を『ほそ道』に用いている。同じく世俗の民との対比でも、芦野では「静」の、安積山では「動」の風狂が描かれ、単調さを免れている。

加藤楸邨による、

早乙女が田を一枚植え終ったので、自分も立去るのだとか、早乙女が立去るのだという味わい方は、文章に流れているこみあげるような感動とは全く異質のものになって、芭蕉らしくないのである。

という批判(注二九)は逆説ながら的を射た部分がある。本文は芭蕉の柳への熱情を描き(芭蕉のこみあげるような感動)、句は無風雅の田植人を描く(異質のもの)、その彼我のコントラストが、『ほそ道』の主人公たる風狂の徒の人物像をより深く彫琢するのである。

ところで、立去るのが田植人との見解を採らない論者からも、柳を立去り難い芭蕉の心情は指摘されて来ていた(注三〇)。

しかし、立去り難い芭蕉が立去っては、その葛藤が表現されない。芭蕉の立去り難さを最も引き出すのは、芭蕉と対置される田植人がやすやすとそこを立去る姿によってである。

なお、重層的な資俊の追悼としては、熱く愛した柳を残し、田植人がやすやす立去るように、儂くも彼岸へ去ったとの理解となる。

二点目は、田植の「動」と、田植人が去った後の「静」との対比の効果である。

この動と静の対比は、既に大正時代において、田植人を主体と見る論者から語られていた(注三一)。

このような意識的な動と静の対比は、芭蕉自身に作例がある。『炭俵』上巻収載「空豆の」の歌仙、初折表四・五句はその例である。

そつとのぞけば酒の最中 利牛

寝處に誰もねて居ぬ宵の月 芭蕉

「此方は寝どころのひそけさ、彼方は酒宴の賑ひ、この対照をきはやかに出したのがこの附である。」(注三二)、「月を賞でての酒宴ともぬけの殻の寝処が対照的。酒宴を思いつつ、宵の月の光がさし込む寝処の静かさを味わうところに隠の美学がある。」(注三三)と言われる芭蕉の付句である。「動」と「静」の対比のみならず、「静」の空間に残された宵月の風韻にも、田植人が去った「静」の空間に残る柳に通うものがある。芭蕉のこのような作例からしても、『田一枚』の句は、田植人の作業風景と、人が去り、柳だけが残された寂寞の景という、動と静のコントラストを演出したものと合理的に理解できる。

田植人を主体とする見解を支持する鈴木健一は、柳と静かに向き合う時間が私(芭蕉)には必要だとし、「私」は「柳」を「立ち去」ってはならない」とする(注三四)。

余人が去った静寂により、西行の倂を化体する柳は、孤高の存在としての位置づけを確かにする。田植人が去り、泥土が沈殿し、澄みわたる早苗田。余人なき静寂の中で差し向かう憧れの人西行の旧跡。風狂人を描く『ほそ道』の本質に照らして、その主人公が、この至福の時、至福の現場を味わうことなしに、柳を立てることができであろうか。

これらの対比があつてこそ、下五「柳かな」の重い詠嘆に、芭蕉万感の思いがこもる。空間の寂寞、柳の風流、そして芭蕉の風狂。

《田一枚》の句は、決して、面白みのない句でも、純粹な客観句でもない。コントラストによって芭蕉の風狂を効果的に表現しようとする一句なのである。

対照法自体ではないが、芭蕉の発句に、意外に比較表現の構造が目立つ旨の指摘(注三五)は本論の理解を補強するであろう。

田植人を主体とする論拠は他にもある。

かつて支考『俳諧古今抄』において、この句の「立去る」は初案では「立よる」であつたと言われていた。しかし、この点は、現代の考証により否定的に解されている。

おそらく支考は、既述した、連歌における「立寄る」「立去る」の選択をもとに「初案」を構成したのであろう。

もっとも、史学では偽書すら「偽書たる史料」たり得るように、支考のこの記述にも意味が見出せる。「立去る」の初案を「立よる」とする発想は、主体を共に田植人との理解を前提とするから、「句法模写変態口授」を言い、主体を芭蕉と見る蓼太『芭蕉句解』に先立ち、芭蕉と同時代人の支考は、「立去る」主体を田植人と認識していたといえる。田植人を主体とする見解の一つの傍証となろう。

その後、中尾本により本来の初案が明らかとなった。初案《水せきて早稲(早苗)たはぬる柳陰》から、一貫して田植人の様子が詠まれているのは、立去る主体が田植人である

ことに親和的である。まさに、芭蕉を主体とする本文の「自」から、田植人を主体とする「他」の句への転じが工夫されたのであろう。

五 結びにかえて

一句の解釈鑑賞は、特に実作者においては、面白さ、意外性を求める方向に陥りやすい。鑑賞の幅を広げる点においてそれは必ずしも悪しきことではない。もともと、特に古典と云うべき句については、そのコンテクストとの調和を図りながらの解釈鑑賞が重要になる。本論は、重層的理解という点で、意外性を求めたと受け取られる可能性があるが、両者の調和を図るべく、できる限り、芭蕉の実作や、芭蕉在世当時の史料、『ほそ道』の本質（本意）を踏まえ、その詩境に目配りをした解釈論を展開したつもりである。

一枚の早苗田に投じた本論という一石が、諸賢による議論の発展に繋がれば幸いである。

脚注

- 一 従前、「早乙女」や「農夫」とする表現が見られたが、一句から、男女の別、人数など明らかではなく、本論では、中立的表現として「田植人」の語を用いる。
- 二 例えば、尾形仿『おくのほそ道評釈』一〇八頁（二〇〇一、角川書店）
- 三 森田雅也『『おくのほそ道』と地方談林俳諧 ―芭蕉が塗り替えた俳諧勢力文化圏―』人文論究六三巻四号二四頁（二〇一四）
- 四 西村真砂子『校本おくのほそ道』七六頁（一九八一、福武書店）
- 五 上野洋三『芭蕉自筆「奥の細道」の謎』一四二頁（一九九七、二見書房）。櫻井武次郎『芭蕉自筆「奥の細道」の顛末』二一三頁（一九九七、PHP研究所）も、これを肯定すると見られる
- 六 尾形仿『『おくのほそ道』を語る』三六頁（一九九七、角川書店）
- 七 『世界古典文学全集第一八巻 大学 中庸 孟子』五〇頁、五二頁（一九七二、筑摩書房）
- 八 『新訂寛政重修諸家譜 第十二』一三六頁（一九六五、続群書類従完成会）の資俊の項に「後新墾の田を合て下野國那須芳賀二郡のうちにして、都て三千十石餘を知行す。」とある。
- 九 『時代別国語大辞典 室町時代編 三』九八三頁（一九九四、三省堂）
- 一〇 両句の句形の類似を指摘したものととして、長谷川權『『奥の細道』をよむ』一〇一頁（二〇〇七、筑摩書房）
- 一一 例えば、弥吉菅一『新選評釈 奥の細道 俳句・俳文・俳論』九二頁以下（一九五九、新興出版社・啓林館）
- 一二 『芭蕉 奥の細道まで ―その鑑賞と批評2―』八六頁以下（一九五五、新潮社）
- 一三 中田亮『田一枚植ゑて立ち去る柳かな』考』文星紀要四号五三頁（一九九二）の分類を参考に、より簡略化した。
- 一四 他にも、「植て」を「植で」と読む佐藤良雄の見解や、西行と芭蕉が植て立去るとする長谷川權の見解などがある。
- 一五 前掲（注二）一一三頁
- 一六 櫻井武次郎『奥の細道の研究』三二六頁以下（二〇〇二、和泉書院）

- 一七 樋口功「奥の細道」総合研究(第三回) 原文・考異・語義・参考」俳句研究二巻七号一七八頁(一九三五)
- 一八 宮本三郎「芭蕉における接続助詞「て」の用法」共立女子大学短期大学部紀要三号四〇頁(一九五九)
- 一九 堀切実ら編『諸注評釈新芭蕉俳句大成』五七五頁(二〇一四、明治書院)
- 二〇 面白さ、意外性を求めるこの句の解釈への消極的見解として、尾形仿ら『シンポジウム日本文学8 芭蕉』八二頁〔堀信夫発言〕(一九七六、學生社)
- 二一 前掲(注一二) 八七頁
- 二二 太田清子「『おくのほそ道』蘆野の里の章段考(一)」日本文理大学紀要三八巻二号二頁(二〇一〇)
- 二三 内藤鳴雪『芭蕉俳句評釈 春夏』一八九頁以下(一九〇四、大学館)
- 二四 前掲(注一一) 九二頁
- 二五 中西満義『西行の和歌と伝承』八四頁(二〇二二、方丈堂出版)
- 二六 今井文男「田一枚」の句」『表現学論考』八頁(一九七六、今井文男教授還暦記念論集刊行委員会)
- 二七 前掲(注二六)
- 二八 前掲(注二二)
- 二九 加藤楸邨『奥の細道吟行』一六頁(一九九九、平凡社)
- 三〇 頼原退藏『芭蕉講話』一四二頁(一九四四、出来島書店)、尾形仿『松尾芭蕉』七七頁(一九八九、筑摩書房)など
- 三一 幸田露伴ら『芭蕉俳句研究』二四三頁〔小宮豊隆発言〕(一九二二、岩波書店)
- 三二 太田水穂『太田水穂全集 第七巻 研究篇』二七〇頁(一九五七、近藤書店)
- 三三 宮脇真彦『芭蕉の方法―連句というコミュニケーション』二二八頁(二〇〇二、角川書店)
- 三四 鈴木健一『古典詩歌入門』二一九頁(二〇〇七、岩波書店)
- 三五 堀切実『表現としての俳諧』二二頁以下(二〇〇二、岩波書店)の「II-4 芭蕉の比較表現」(初出は表現研究四四号二六頁、一九八六)